

Paddy and Water Environment 誌の2024年の現状と今後の展望

The status quo and perspectives of Paddy and Water Environment journal in 2024

飯田俊彰

Toshiaki IIDA

1. はじめに

Paddy and Water Environmentは、2003年の創刊以降、水田農業研究の成果の世界への情報発信を目指し、農業農村工学会のサポートを得て発刊されてきた。この間、インパクトファクター（IF）の取得と向上を着実に実現し、水田稲作と稲作地帯での水環境の分野をカバーする国際学術雑誌としての地位を確立してきた¹⁾。2024年7月から、Chief Managing Editorに東京農工大学の加藤亮教授が就任し、日本、台湾、韓国の3カ国の編集委員も再編成された。本稿では、2024年時点での本誌の現状を報告するとともに今後を展望する。

2. 本誌の発刊と評価の現状

2. 1 掲載論文数 本誌は、創刊から2024年までに毎年4号ずつ22巻を発刊した。2024年には第22巻の1～4号が発刊され、46報の論文等が掲載された。その内訳は、Reviewが1報、Articleが44報、Technical Reportが1報だった。一方、2024年の本誌への総投稿数は263報で、その内訳は、Articleが234報、Reviewが25報、Short communicationsが3報、Technical reportが1報だった。2023年までの直近3年間（2021～2023年）の総投稿数は185～190報で、2020年以前に比べてやや低迷していたが、2024年の総投稿数は2023年までの直近3年間の平均値と比べて約40%増加したことが特徴的だった（Table 1）。PAWEとしては投稿奨励のアクションは特に行っていないが、個人

会員レベルでの投稿奨励やSpringer社のPRなどの効果が有ったものと推測される。

投稿された論文の筆頭著者の所属国は全世界に及び、2024年に投稿が多かった国の上位5カ国は多い順にインド、イラン、中国、日本、バングラデシュだった。

Table 1 PAWE への投稿状況と採否決定までの日数

Table 1 Submissions to PAWE and Days to decision

Year	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024
Total Submitted	236	256	230	190	185	187	263
Total Decisioned	214	248	209	186	132	157	206
Accept	57	42	49	48	32	44	46
Reject	157	206	160	138	100	113	160
Acceptance Rate (%)	27	17	23	26	24	28	22
Average Days to First Decision (By f.d.d.) (d)	75	49	56	66	54	73	61
Average Days to Final Disposition Accept (By f.d.d.) (d)	282	295	236	224	210	204	210
Average Days to Final Disposition Reject (By f.d.d.) (d)	63	36	48	53	37	75	52

岩手大学農学部 Faculty of Agriculture, Iwate University

キーワード：PAWE, 掲載論文, 査読プロセス, インパクトファクター

2024年に掲載可となった論文の筆頭著者の所属国はインドと日本が7報で最も多く、続いて中国が6報、バングラデシュと台湾が4報だった。

2. 2 査読プロセス Table 1に示す通り、2024年に査読結果が出た論文数は206報だった。うち、Acceptが46報、Rejectが160報で、採択率は22.3%だった。過去5年間の平均の採択率は23.1%(215/932)で、2024年には採択率は平年に比べてやや低かった。投稿から判定までの日数を見ると、2024年には最初の判断までに平均で61日を要し、Acceptの最終判断までには平均で210日、Rejectの最終判断までには平均で52日かかった。判定までの時間を2023年までの直近6年間の平均値と比較すると、Acceptの場合には約1カ月短く、Rejectの場合には同じで、全体としてはほぼ同じだった。引き続き、査読やハンドリングの効率化、迅速化を進める必要が有るが、Rejectの方が数が約3倍多いので、Rejectの場合の時間を短縮することが効果的と思われる。2024年の査読プロセスでは、欧州の水田研究者がReviewerに招待されるケースが増えたことが特徴的だった。2024年からイタリア人Editorが新しく加わった影響と考えられる。

2. 3 IF 本誌のJCR IFは獲得年(2012年)の0.986から変動し、2015年には0.871へ低下したが、2019年以降に上昇し、2022年には初めて2を超えて2.190に上昇した(Fig.1)。2023年には、Citations(IF計算の分子)が2022年より減少して165件となり、Citable items(IF計算の分母)も減少したことにより、IFは少し下がって1.941となった。2021年以降、Citable itemsの減少が続いており、次の2024年にもこの減少は継続する。Citable items

すなわちIF計算の分母の減少はIFの向上という観点からは歓迎すべきである。この間、採択率は変動しているものの、被引用数という面でより少数精鋭の論文が掲載されていると理解されるが、今後もこの方針を継続してIFの向上を目指していくことが望まれる。IFによるランクは、2023年には、

Agricultural Engineeringカテゴリーでは20誌中10番目、

Agronomyカテゴリーでは125誌中44番目で、特にAgronomyカテゴリーでは2022年の88誌中36番目から大きく上昇した。Agronomyカテゴリーでは2024年には学術雑誌数が大きく増えたが、世界のライバル誌中で本誌は上位1/3に近いランクに位置している。

3. おわりに

2024年の本誌への総投稿数は2023年までの直近3年間の平均値と比べて約40%増加した。本誌への注目度が高まっていることが窺える。本誌の2023年のIFは前年から少し下がって1.941となったが、少数精鋭の論文が掲載されていると理解される。本誌の魅力を高めIFをさらに向上させるため、Review paperや特集号などの企画の検討等と同時に、引き続き、的確かつ迅速な査読プロセスの運営が必要と思われる。

引用文献

1) 飯田俊彰(2024):Paddy and Water Environment誌の2023年の現状と今後の展望, 2024年度農業農村工学会大会講演会講演要旨集, T-3-2, 701-702

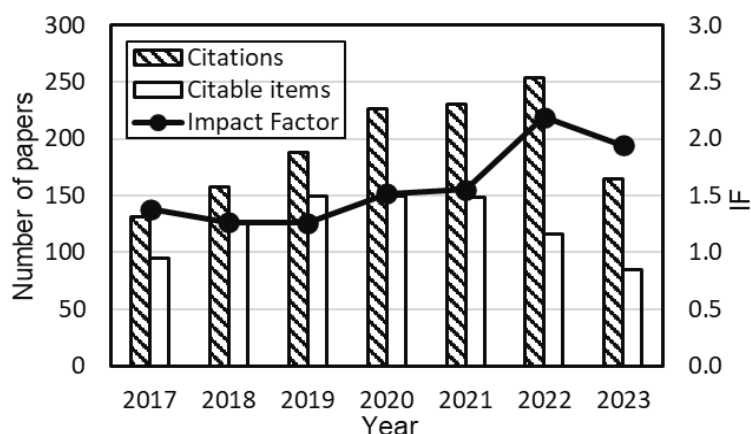


Fig.1 PAWE の Impact factor (IF)の推移

Fig.1 Changes in Impact factor of PAWE